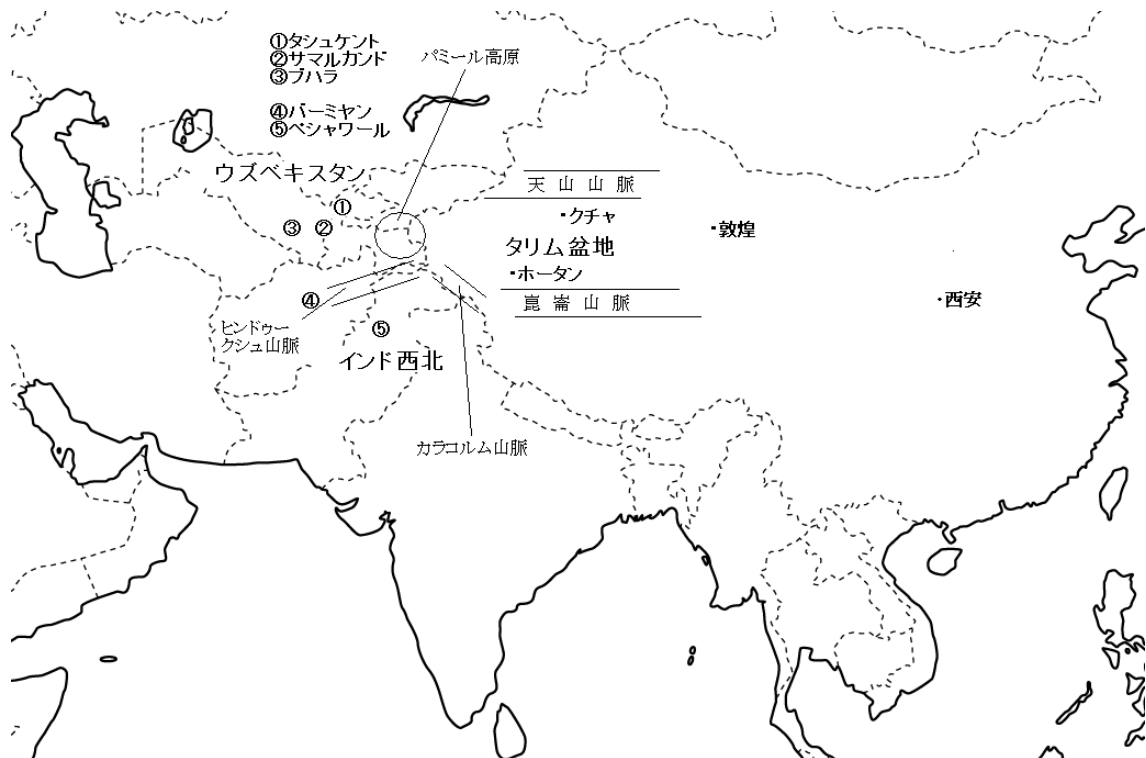


貨幣の道

吉池孝一

1. 貨幣の道

シルクロード(絹の道)という言葉は、狭義には、タリム盆地周辺を經由して、ユーラシアの東と西を結ぶ交易路を指わけであるが、この道は東西の貨幣の様式が伝播した道、すなわち「貨幣の道」でもある。これより下の地図をみながら貨幣の道をたどってみようとおもう。



2. 貨幣様式

ここで言う貨幣の様式とは何か。貨幣は、円形か方形かなどの形態、打刻か鑄造かという製造法、支配者名・神名・貨幣単位・年号などの銘文内容とその表現形式、銘文に用いられる文字と言語の種類などにおいて、地域や時代の別により一定の型を持っている。ここでは、このような一定の型を「貨幣様式」と呼ぶ。

そこでユーラシアの古代貨幣をごく大雑把にながめると、そこに幾つかの様式のあることを見て取ることができる。ギリシア文字で王名(属格)を刻印した銘文を持つギリシアの円形打刻銭、漢字による貨幣単位や年号などの銘文を持つ中国の円形方孔鑄造銭などである。前者をギリシアの代表的な貨幣の様式として「ギリシアの貨幣様式」と呼び、後者を中国の代表的な貨幣の様式として「中国の貨幣様式」と呼ぶことにする。小文では、シ

ルクロードに沿って、貨幣そのものではなく、貨幣の様式がどのように伝わったかということを見る。

3. 三つの問題

下限を唐代頃までとしてシルクロードの貨幣を俯瞰すると、そこに三つの出来事を見取ることができる。一つ目はギリシアの貨幣様式の東漸¹、二つ目は中国の貨幣様式の西漸、三つ目は2言語併用貨幣（文字に着目するならば異種文字併用貨幣ということである）の出現である。

一つ目に挙げたギリシア貨幣様式の東漸であるが、その東限は、パミール高原の西、ヒンドークシュ山脈北側のバクトリアが興った地域である。ここはアレクサンドロス大王（在位 336-323B.C）の死後、ギリシアの遠征軍によって建てられた王朝であり、ギリシア文字の王名（属格）を銘文に持つ円形打刻銭が発行された。紀元前3世紀中頃のことである。もっとも、円形打刻という様式のみでの伝播となると、タリム盆地のホータン一帯で発行されたとみられる所謂“シノ・カローシュティー銭（ホータン馬銭、漢佉二体銭とも言う）”（紀元後2世紀後半頃）がある²。これは漢字漢文とカローシュティー文字ガンダーラ語の銘文を持つ円形打刻銭である。なお、1960年代に陝西省・甘粛省・安徽省などの地からギリシア文字を模した銘文が鑄込まれた鉛銭が総計309枚ほど発見されたという。この貨幣の来歴については様々に論じられており未だ定論がないようなので暫くは考慮の外におくことにする³。

二つ目に挙げた中国貨幣様式の西漸であるが、その西限は、パミール高原を西に抜けた現在のウズベキスタン共和国（古のソグディアナの地）のブハラ辺りである。この地からブハラのタムガと“開元通寶”という漢字銘文が鑄込まれた円形方孔鑄造銭が出ており、紀元後7-8世紀に発行されたものとされる⁴。この様式は当時東西交易に活躍したソグド人によって運ばれてきたものである。なお、後の時代に関わることであるが、ソグド人が用いたソグド文字は西から東へと広がりながら少しずつ改変され、ウイグル文字、モンゴル文字、満洲文字となった。これらの文字による銘文を持つ貨幣も発行されることになる。

¹ 田辺 1992 には次のようにある。「ギリシア世界はマケドニアのフィリッポスⅡ世によって統一されたが、フィリッポスⅡ世は表に神の胸像、裏面にマケドニアの民族意識の高揚を暗示する騎馬像、戦車競争図などを刻印し、発行者たる国王の名前(属格)をギリシア文字で示した。その息子のアレクサンダーⅢ世(大王)はアケメネス朝を前330年に滅ぼし、西はエジプト・地中海から東はインダス川・オクサス川に及ぶ大帝国を作った。そして、オリエントにはしだいにヘレニズム文化が熟成していった。大王は表にヘラクレス神、裏面にゼウス神と自分の名前(アレクサンドロスのという属格)を刻印した4ドラクマ銀貨を標準貨幣として発行した。表のヘラクレス神は大王の肖像ともいわれるが、以後、オリエント世界にはこの大王のコイン・タイプが踏襲されるようになった。」(54頁)。例としてアレクサンドロスの名前のある銘文をみると、ギリシア文字で Α Λ Ε Ξ Α Ν Δ Ρ Ο Υ (アレクサンドロスの)、 Β Α Σ Ι Λ Ε Ω Σ Α Λ Ε Ξ Α Ν Δ Ρ Ο Υ (王アレクサンドロスの)のように王名(属格)がある。

² 小谷 1999 はシノ・カローシュティー銭の発行を紀元後170年前後の時期に限定する。

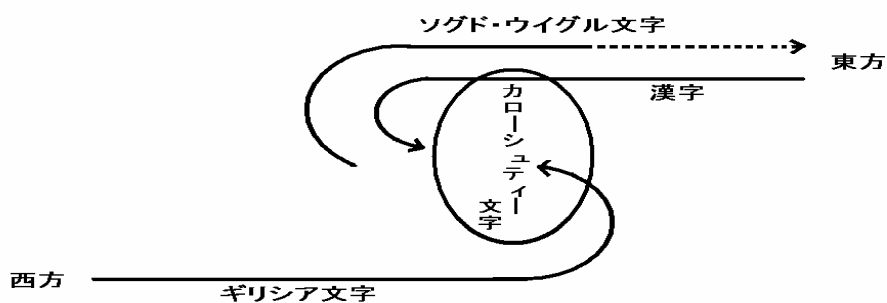
³ 張忠山主編 1999 の197頁参照。

⁴ с м и р н о в а 1981 の316-318頁参照。

三つ目に挙げた2言語併用貨幣の出現であるが、パミール高原の南にあたるインド西北での出来事である。先に述べたように、ヒンドークシュ山脈の北側でバクトリアが興りギリシア様式の貨幣が発行されたわけであるが、この勢力は、その後ヒンドークシュ山脈を越え、その南側のインド西北部に進出した。新たに進出したインド西北部はカローシュティー文字で書かれたガンダーラ語が行われていた地域であり、この地域への進出の後、支配者の文字と言語であるギリシア文字ギリシア語銘文と被支配者の文字と言語であるカローシュティー文字ガンダーラ語銘文が併記された貨幣即ち2言語併用貨幣が発行されることとなった。紀元前2世紀中頃のことである。これ以降、歴代の王によって同種の2言語併用貨幣が発行され続け、ギリシア文字とブラーフミー文字の2言語併用貨幣も発行されることもあった⁵。このような2言語併用貨幣はタリム盆地周辺にも現れることになる。ホータンのシノ・カローシュティー銭(紀元後2世紀後半。漢字とカローシュティー文字)、クチャの亀茲五銖銭(紀元後5-7世紀。漢字とブラーフミー文字)である⁶。さらに7-8世紀にはソグディアナ周辺でソグド文字と漢字の2言語併用貨幣が発行された⁷。この流れは、モンゴル時代のアラビア文字とモンゴル文字併記の貨幣、さらにそれより数百年後の漢字・満洲文字・アラビア文字が併記された清朝の新疆紅銭(ハニシ)にまで及ぶものとおもわれる。

4. 貨幣様式の変更

最後に、先に述べた三つの問題につき、貨幣銘文に使用された文字に着目して模式図を描いてみた。



⁵ P. L. グプタ 2001 の 24 頁、渡邊 1973 の 22 頁参照。

⁶ 2言語併用の小型の方孔円銭。亀茲は現在のタリム盆地北側の庫車(クチャ)県に相当。玄奘『大唐西域記』(7世紀前半)の屈支国(亀茲)の条に「貨幣には金銭・銀銭・小銅銭を使用している」とある「小銅銭」がこれであるともされる。蘇曄・劉玉榮 1998 の 54-56 頁によると、5世紀～7世紀に亀茲で鑄造されたもので、ブラーフミー文字トカラ語が書いてあるらしい。

⁷ смирнова 1981 の 101-103 頁参照。

時代としては先にギリシアの貨幣様式の東漸があり、後に中国の貨幣様式の西漸があった。東漸の東限と西漸の西限はともものパミール高原周辺ということになる。銘文に使用されたギリシア文字と漢字の東限と西限もほぼ同様である。なお、ギリシアの貨幣様式の東漸はアレクサンドロス大王の東征を契機とするものであり、中国の貨幣様式の西漸については東西貿易に従事したソグド人に負うところが少なくない。

さて、ギリシアの貨幣様式は東漸し、カローシュティー文字ガンダーラ語が行われていたインド西北の地において期を画するほどの変化を被ることになる。それは貨幣の表裏に異なる文字と言語の銘文を採用した2言語併用貨幣の発行となってあらわれた。思うに、一度確立した貨幣の様式を変えて、これまでにない新たな様式を採用するという事はそれほど容易なことではない。しかしながら事實は、2言語併用貨幣という新しいタイプの貨幣が発行されたわけであり、これは貨幣に於ける習慣の大きな変更にはかならない。なぜこのようなことが可能となったのであろうか。支配者側と被支配者側の文字言語をそれぞれに表記する必要があったのだと言えば、それはその通りであろう。また2言語を併記した資料もそれほど珍しいものではない⁸。しかしながら、その社会に2言語表記の「必要がある」ということと、アレクサンドロス大王以来続いてきた貨幣様式を大きく変えて2言語併記を貨幣銘文として「採用する」ことの間にはいま一つ何か欲しいところである。

インド西北ではギリシアやインドやイランなど様々な習慣を持った民族の接触があったわけであるが、この接触を通して、様式の変更すなわち習慣の型の変更にたいして寛容となる「傾向」が生じており、それが2言語併用の銘文の採用を促したと考えたい。そのような考えが許されるとしたならば、2言語併用貨幣が生まれたインド西北のガンダーラ（現在のペシャワールー帯）の地は、その後、革新的な大乘仏教運動の情報発信源となるわけであるが、その運動にとってプラスに働くであろう「傾向」すなわち「変化に対する寛容の傾向」が、その運動に先立って既に醸成されていたことを、この2言語併用貨幣の発行が示唆しているとも言えよう。

参考文献（発行年順）

渡邊 弘 1973. 『西域の古代貨幣』, 学習研究社。

Смирнова О. и. 1981. *Сводный каталог согдийских монет. Бронза*. Москва: Наука.

田辺勝美編 1992. 『[平山コレクション]シルクロードのコイン』, 講談社。

モーリス・ポープ著/唐須教光訳 1995. 『古代文字の世界 エジプト象形文字から線文字 B まで』, 講談社 学術文庫。

⁸ たとえば、エジプトのアレクサンドリアからそれほど遠くないロゼッタの地で発見された所謂ロゼッタ・ストーンは紀元前 196 年のプトレマイオス五世を記念する布告をエジプト象形文字とギリシア文字ギリシア語で併記した碑文であり、これはいま問題としている2言語併用貨幣とほぼ同時代のものである。以上はモーリス・ポープ著/唐須教光訳 1995 の 115-163 頁参照。

蘇擘・劉玉榮 1998. 『古幣尋珍』, 文物出版社。

小谷仲男 1999. 「シノ・カロシュティ貨幣の年代 一付録『後漢書』西域伝訳注一」, 『富山大学人文学部紀要』第 30 号, 17-48 頁。

張忠山主編 1999. 『中国絲綢之路貨幣』, 蘭州大学出版社。

P. L. グプタ著/山崎元一他訳 2001. 『インド貨幣史 一古代から現代まで』, 刀水書房。